チンギスハンの霊廟発見

日本モンゴル合同調査団 近くに陵墓存在か

モンゴルのアウラガ遺跡を調査している日本モンゴル合同調査団（総隊長・加藤晋平元国学院大教授）は、四角形の基壇上に造られた十三―十五世紀の霊廟（れいびょう）跡を発見、四日、東京都内で記者会見し「チンギスハンを祭った霊廟と考えられ、長い間謎だったチンギスハンの陵墓を発見する重要な手掛かりになる」と発表した。

チンギスハンの霊廟の跡とみられる礎石や柱穴（2001年9月、モンゴル・アウラガ遺跡）

地上に何も残さないで葬られたとされる、モンゴル帝国の創始者、チンギスハンの陵墓の在りかは世界史上の大きな謎の一つとされてきた。霊廟跡からは陵墓についての歴史書の記述と一致する証拠が多く見つかり、陵墓発見に大きく迫った。

調査団によると、中国の史料から、アウラガ遺跡がチンギスハンの宮殿「大オルド」だったとみて発掘を開始。約二十五メートル四方の基壇の上で、霊廟の跡とみられる礎石や柱穴を確認した。瓦やレンガが出土していないことから、テントで上屋を造っていたとみている。

霊廟内には上から見ると「凸」の形に高さ約四十センチの石の壁がめぐり、火をたいた跡があった。基壇の周囲には灰や馬の骨を埋めた穴が見つかり調査団はチンギスハンを祭るため馬などを焼いた「焼飯」（しょうはん）の儀式が行われた証拠と判断、中国の歴史書の記述と一致するとしている。さらに霊廟の南側からは皇帝のシンボルとされる竜の文様を描いた香炉が出土。十四世紀のペルシャの歴史書にある「チンギスハンの大オルドは墓所に近く、いつも香がたかれている」という記述と一致するという。

調査団の白石典之新潟大助教授（考古学）は「焼飯の儀式が確認されたことで、チンギスハンの霊廟と確定した。他の王朝の陵墓と、陵墓を祭る施設の距離関係から、アウラガ遺跡から半径十二キロの範囲内にチンギスハンの陵墓があるのではないか」と話している。

儀式の跡など文献を裏付け

「墳丘も墓石もない」。十三世紀のイタリア人宣教師カルピニが残した旅行記の通り、チンギスハンの陵墓の在りかは長い間謎だった。しかしモンゴルのアウラガ遺跡で見つかった霊廟（れいびょう）跡からは、馬を使った儀式の跡など歴史書の記述と一致する数々の証拠が見つかり、陵墓発見に大きく近づいた。

盗掘を避け、遊牧に差し支えないよう大きな墳丘を造らなかったとされるチンギスハンの陵墓は、中国の内モンゴルやロシアを含めた多くの候補地がある。

一九六〇年代から、東ドイツやフランスの調査隊が探索してきたが、発見には至っていなかった。

国学院大などの合同調査団は、葬送をつかさどる役人が馬や羊を焼く焼飯（しょうはん）の儀式をしたという中国の歴史書「元史」の記述に着目。

今回の発掘で骨や灰が見つかり、中でも馬は獣の骨全体の四割を占めていた。

国立民族学博物館の小長谷有紀教授（文化人類学）は「焼飯は、煙にして祖先に供物を届ける儀式。馬は当時、最速の乗り物で、馬を焼くことは最上級の人物を祭ったと考えられ、チンギスハンが当てはまる」と解説する。

さらに霊廟跡からは、他の歴史書が歴代皇帝の祭祀（さいし）に使われたとする香炉なども出土した。

日本経済新聞　2004年 10月 5日